

# 立命電友会

## 「二十一世紀に向けて新たな発展を」

オムロン株式会社 顧問(電子決済事業担当)

池田 育弘(昭三十二年卒)

### 電友会会長就任にあたって

去る十一月二日に京都都ホテルで開催されました電友会総会に於きまして、ご出席の皆様がたのご推挙により、第二代目の電友会会長を仰せつかることになりました。初代の得田会長におかれましては、本電友会発足準備の段階から初代会長としてのご在任四年間と合わせて随分長い期間に亘って本会の発展の為に尽力を賜ってまいりました。



この間会員規模も年々拡大し、副会長を始め各役員の皆様のご努力の結果、電友会の今後の発展の基盤は堅固に確立されたものと認識し深く感謝致しているところであります。

このような輝かしい「基盤と未来」をお預かりすることは、私にとりまして望外のことであります。すし、その重責と自らの浅学菲才を省みて身の引き締まる思いであります。

会員の皆様がたのご支援とご協力を頂戴いたしまして鋭意努力をしてみたいと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。二十一世紀への弾みを

奇しくも、私の本会会長の任期は丁度二十一世紀を迎えるまでと言うこととなります。

今日わが国は、国家社会としても、産業経済の面からも、文化教

育の視点からも過去の五十年間の発展と歪みを冷静に評価し転換を始めねばならないターニングポイントにさしかかっているところでありましょう。この認識のもとに、既に多くの局面で変革の着手と努力が進捗している現実があります。このことに付きまして、本会の関連の視点で愚考を述べてみたいと存じます。

アジア、パシフィック諸国の今後の画期的な発展と成長と並行して、二十一世紀の日本を創る局面の一つに「産学官」の連携と協同の新しい運営、効果、実績を追求することにあるのではないのでしょうか。世界をリード出来るニューテクノロジの開発も、活力ある産業の旗手としてのベンチャービジネスの創出も、規制からはみでての新しい産業経済の分野の創出も、これらを果敢に実現していける有能な人材輩出も、すべては「産学官」の新たな連携と協同から産み出していかねばならないことになるでしょう。

「産学官」から「学産官」へ 我々が母校、立命館大学、わけでもBK C(びわこ・くさつキャンパス)は「学」サイドの連携体制と運用システムは群を抜いて充実し活用されつつあり誠に心強いものがあります。東のKF Cに対する、西のBK Cとやら言う週刊誌的な評価は色々な点で異論のあるところでしょうが「日本のスタ

ンフォード大学」をめざすことには異論の少ないところでありましょう。

「官」が積極的な支援をし、「産」がニーズを持ち込んでくれれば「学」はがっちり受けとめてやる——と言う受け身の万全体制から出発して、早い段階で三者の中で「学」が先頭に立って他の二者を「リード」することこそが、過去の成長の五十年とは異なる「新しい日本」を創出できるニューパラダイムになるものと確信するものであります。

「基礎、基本」のところの変革は、必ずしも産業の得意な分野ではありません。「学」の世界で従来の「常識や蓄積」を越えた発想や自由な取り組みから「メークラウドラマ」ならぬ「メークラウド」な科学技術のシーズを切り開いてもらいたいと期待するものです。ジム・クラーク、マーク・アンドリーセン、ビル・ゲイツの類例の輩出を夢みるわけではありませんが、かならずや近い将来に「学」の開発になるニューテクノロジがリードし「学」が創業を動機づけ、我々が資本の提供や経営への参画をすると言う組み合わせで、十億、百億サイズ企業の幾つもを誕生させるようなことを実現したいものであります。

### 高齡化、小児化時代を 逆手にとつて

二千二十年には六十五歳以上比

が二十五%になり、この直前から総人口が減少に転ずると予測されております。

脆弱で、頑迷固陋で、アログントで、回顧癖が強く、と高齢者を敬遠する言葉は多いが(自分の事を言うようで幾らでも出てくる)二十一世紀に向けての高齡者は元氣と活力に溢れ、柔軟かつ従順で、高技能で低報酬で、身辺の拘束が少なく、挑戦的で創造的な世代と言うことになるに違いないでしょう。

米国の高齡者による「サンシティ」の例に見るまでもなく、二十一世紀には高齡者が社会の主要構成者の一群をなす事になります。

小児化への対応は一朝一夕に変化させるものではなく「ゆで蛙」的な側面もありますが社会的風潮として第三次、四次ベビーブームでも起こすか、百万、千万の規模の外国人を受け入れ、混血化による新日本人種を創るかの選択を若者世代に迫られるかもしれません。何れの局面を考察してみても、二十一世紀は二十世紀と歴然と異なる社会に変革されていくことになりましょう。前世紀の人々も今世紀への転換期に同様に考えたのかも知れないと苦笑しつつペンを置くことにします。

会員各位のご健勝とご発展を、母校の発展と併せてご祈念致しております。

## 新任ごあいさつ

光工学科

濱川圭弘

昨年四月、光工学科の創設とともに着任、ごあいさつが遅くなつて申し訳ありません。湖南アルプスを背にした明るいサニーヒルに新築されたびわこ・くさつキャンパスにピッカピカの一年生の積りで胸をふくらませて楽しく通勤して居ります。

ピッカピカと云う言葉は、誰かに厚顔ましいとおしかりを受けそうですが、これは新築キャンパスの新設学科に新任させていただいた小生の気分一新を正直に述べたと云う意味で御了承願いたく存じます。

今一つ正直に泥を吐けば、人間はそれほど新しくもなく、昨年三月大阪大学を定年退官して、後に述べるようにこれまでの専門を生かす場として光工学科に着任させていただいた次第です。それにしても人間の「運とめぐり合せ」と云うのは不思議なもので、私はこれまで仕事の場を動く度に新設学科や新築の研究室を渡り歩いてきたように思います。すなわち大阪大学院博士課程在学時代、工学部に電子工学科が創設され、東野田

のキャンパスに工学部二号館と称する六階建(当時はこれで高層ビル)が新築され、助手着任とともにそこに研究室を移し、次いで、昭和三十七年、石橋キャンパスに基礎工学科が創設されて、そこへ講師として着任、建物が出来上がった三十九年、助教授として研究室を移しました。さらに米国イリノイ大学に材料科学研究所(MRL)が創設されて、客員助教授として、やはりピッカピカの研究所に着任、その後阪大にもどつて以来、平成二年に極限物質研究センターの建物が出来上がって二年後にセンター長として着任、そして今回のBKCキャンパスと、吾が人生で五回の研究場所の移転の全てが、云わばピッカピカの出来たての建物に入居、という点で、ラッキーボーイであったと思います。こう書いてくると自分の幸運を自画自賛しているようですが、新設と云うことになる研究室の装置の間取りや附属施設の設計から、果ては文部省などへの申請手続きなどで、一苦労も二苦労もして来ているのも事実です。

さて、専門の研究分野、半導体を中心とする材料の創製とその電子物性、光電物性を通して電子帯構造の研究、界面物性とその光エレクトロニクス機能素子の研究などを取り組んで参りました。変動分光法を用いた基礎物性の研究成果は紙面の都合で省きますが、応用物性の分野で開発してきたキーワードを御紹介しますと、発光・受光素子、光センサ、太陽電池、チューナブルELディスプレイデバイス等があります。

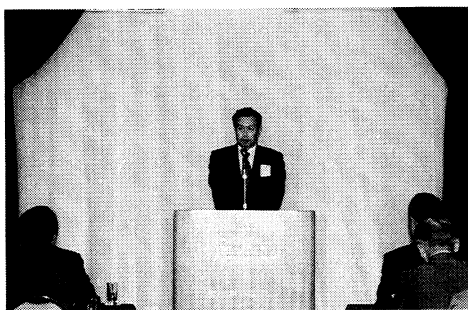
「光で拓く二十一世紀」という表題の光工学科開設記念講演でも述べました通り、二十一世紀のハイテクは、光情報処理から光通信スーパーハイウェイからクリーンエネルギー太陽電池やレーザ応用に至るまで、光技術がその中心になるものと予測されて居ります。文字通り光の明るい将来をめざして、もう一仕事頑張りたいと思つて居ります。

立命電友会  
第二回総会開催

平成八年十一月二日、立命電友会総会は、都ホテルのコスモホールにおいて約九十名の会員参加を得て開かれた。当日は、同ホテルにおいて全校校友大会が午後五時より開催されるので、本会終了後に合流することを前提として午後三時より開催された。総会は、会則による四年に一度の定期総会であり、立命電友会創設以来の会運

営・活動の総括の上にたつて今後の一層の活性化を図ること、次期の執行部体制を選出することが主要な目的である。なお、本総会を迎えるに当たつての議題整理と次期体制については、九月二十一日に役員会において予め検討がおこなわれている。

総会は、中西恒彦事業幹事の司会のもと、当日、急病で欠席された得田益男会長に代わり、荻屋公明副会長より挨拶があり、会発足後の足場を固める四年間を初代会長として重責を担つていただいた得田会長に対して、また、この間に本会運営の財政的基盤を確立するため多くの卒業生が終身会員として結集いただいたことに対して謝意が述べられた。続いて、辻村



寛氏を議長に選出し議事に入った。まず、会設立以来の経過報告、事業報告が中西恒彦氏・高山茂氏の両事業幹事より報告されたが、その主な内容は以下の通りである。イ、各年度役員会の開催  
ロ、会報発行 年二回で内一回は全卒業生に送付  
ハ、電気電子フォーラムの共催  
ニ、卒業生を送る祝賀会への後援  
続いて、会計報告が津田川幹事(会計担当)よりなされ、監査結果が栗路真博会計監査により報告された。会の単年度決算では支出超過になっているが、その主たる原因は会報の郵送料値上げによるものであり、今年度、終身会費納入率の向上を呼びかける取り組みをおこなっているので克服できる

見通しであるとの説明がなされた。なお、昨年末で会費納入者は千五百名に達している。

会則の一部改正 BKC移転を契機として大学院と学科の再編拡充が図られ、光工学科を新設し電気電子工学科と併せて二学科を電気電子系として組織・運営がはかれることになっている。光工学科は平成七年度から開設されているので立命電友会構成員として新学科在籍者を加えることが諮られ承認された。

次期四年間の事業計画、会運営の重点については、基本的にはこれまでの経験をいかした取り組みとなるが、安定した財政基盤の確立のためにも終身会費の納付を積極的に呼びかけていくことが確認された。また、総会の持ち方については、今回のように全国校友大会の日に同じ会場で設定することが望ましいとの意見もだされた。

続いて次期役員改選に入り、得田会長のご推挙もえて、過日の役員会により推薦をした池田育弘氏（昭和三十二年卒・元オムロン株式会社専務取締役）が満場一致で選出された。副会長については辻村氏・中島氏・荏屋氏に加えて新しく加納久雄氏（昭和三十年卒）、石井英敏氏（昭和四十五年卒）の就任で補強が図られ、事務局長を

津田川勝氏にお願いすることが了承された。

最後に、池田新会長より就任の挨拶があり、会員の協力要請と力強い決意が述べられた。また、学系長の岡田正勝教授、および今年度より理工学部長に就任された井上和夫教授（昭和三十三年電気工学科卒）からも理工学部現状と本会にたいする期待が述べられ総会を終えた。（文責 辻村）



## 新役員紹介

会長

池田育弘（昭三十二年卒）

副会長

辻村 寛（昭二十八年卒・教員）

加納久雄（昭三十年卒）

中島 一郎（昭三十一年卒）

荏屋公明（昭三十二年卒・教員）

石井英敏（昭四十五年卒）

会計監査

前田稔夫（昭三十年卒）

栗路真博（昭三十四年卒）

事業幹事

津田川勝（昭四十四年卒・教員）

中西恒彦（昭四十一年卒・教員）

篠田博之（教員）〈庶務担当〉

高山 茂（昭五十九年卒・教員）

島津英誉（昭四十一年卒）

天野佳則（昭四十六年卒）

島田義一（昭五十一年卒）

幹事

砂崎道夫（昭二十年卒）

得田益男（昭二十年卒）

辻 正博（昭二十四年卒）

濱田実男（昭二十四年卒）

木村豊茂（昭二十六年卒）

竹口良門（昭二十六年卒）

和田正義（昭二十六年卒）

小山仁平（昭二十七年卒）

石井 実（昭二十九年卒）

樋口昌利（昭三十年卒）

藤岡孝造（昭三十年卒）

中西一夫（昭三十一年卒）

西村明男（昭三十一年卒）

中井信治（昭三十一年卒）

安田義彦（昭三十一年卒）

小松 明（昭三十二年卒）

植村義彦（昭三十二年卒）

山本正之（昭三十二年卒）

澤田謙造（昭三十二年卒）

松井新三（昭三十二年卒）

富森昭博（昭三十三年卒）

荒木 敏（昭三十四年卒）

岩木保雄（昭三十四年卒）

中澤 誠（昭三十五年卒）

橋本武久（昭三十五年卒）

島津良昭（昭三十五年卒）

山川貞太（昭三十六年卒）

鈴木良一（昭三十七年卒）

秋山憲成（昭三十八年卒）

南 能寿（昭四十二年卒）

瀬見英利（昭四十四年卒）

津田見真（昭四十四年卒）

高杉雅昭（昭四十六年卒）

疋田純一（昭四十六年卒）

小西正秀（昭四十七年卒）

稲田耕史（昭五十一年卒）

吉松 繁（昭五十四年卒）

久保村浩（昭五十九年卒）

本庄謙一（平成元年卒）

（卒業年順）

幹事（在職教員）

荒木義彦（昭四十四年卒）

池田光男

井上和夫（昭三十三年卒）

今井 茂

岩崎 博

浮田宏生

浦山 隆（昭三十三年卒）

岡田正勝

亀井且有（昭五十三年卒）

川畑隆夫

北澤敏英

小松康廣

左貝潤一

杉本末雄

高倉秀行

寺井秀一

名西徳之

濱川圭弘（昭三十一年卒）

三木秀二郎

溝尻 勲

山内寛紀

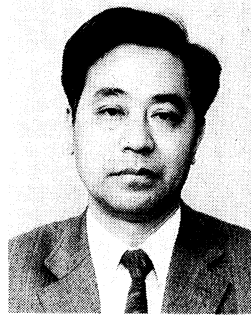
山田廣成

（五十音順）



# 大学の教官として 過して来た事

堤 誠  
(昭三十六年卒)



大学の教官として過して来た事という題材で電友会のために執筆するとなるといかにも停年に際して一言という印象を受けるが、確かに立命館大学昭和三十六年卒業という事になればその年輪から察してやむを得ない。ここでは学生時代を通じて現在私が行なっている仕事、これからの大学の課題などについてざつぱらんに記して見たい。

当時、私は中学・高校を通じて理科が大好きでその中でもモーターとかラジオそしてスピーカといった電気に関するものに何か非常に夢中にさせるものがあり、この点三つ子の魂は百迄が私の場合あてはまる様である。

そこで理工科系の大学でまず入

学出来る大学はないかと言う事が立命館大学電気工学科との出会いであるらしい。しかしながらそれにもまして末川総長の人間的な魅力と説得力のあるあの話ぶりが立命館を選んだ理由である事も確かである。

当時理工学部内に衣笠球場があり、そこには高いアンテナがあった。入学願書を持っていた際、このアンテナを理工学部の設備と思ひ、入学後、これが京都放送局のアンテナであったという笑えない思い出もある。しかしながら理工学部における授業は非常に分りやすく、特に電磁気学とか電気回路そして無線工学などの基礎科目に関してはその内容を十分理解する事が出来、これが現在の専門の電磁波工学、通信工学の礎になった事は間違いない。このあたり今の立場から考えると当時の教員の負担はかなりのものであったのではないかと想像する。いずれにせよ昭和三十年代は学生もカッコ良くは無くどこかバンカラでさらに知識にたいしてはハングリのところがあった様である。その当時の教室は学生数から見ると狭く、授業によつては席の奪い合いもあった。この点今のびわこ・くさつキャンパスでの広い教室からは想像できない風景である。

その後大阪大学工学部通信工学科の大学院に進学し、一度東京芝浦電機の研究所に勤めたものの縁があつて大阪大学工学部の助手として勤務する事が出来た。ここでまず手がけたのはフェライトと呼ばれる磁性体に現われる電磁気現象に関連した研究でこれが現在行なっているマイクロ波・ミリ波フェライトデバイスといった電磁波工学の研究の始まりにもなっている。確かに大阪大学での二十五年間は紆余曲折もあり苦労もあつたが非常に幅の広い知識をいろんな分野の先生から学んだ事、そして何よりも数多くの優秀な学生を世に送り出した事は自慢の一つでもある。しかしながら大阪大学ではいわゆる一家の主でなくこれが堤研究室としてスタートしたのは七年前の京都工芸繊維大学電子情報工学科に移ってからである。

ここで現在私が行なっている研究などを記して見たい。研究分野も教育・研究のスタッフの充実や学生数の増加などで多岐にわたっているが、その中でも特に電波と光との融合技術の研究に力を注いでいる。これは別の見方からすると、昔の無線通信と有線通信との融合技術とも言える。マルチメディアとかPHSそしてインターネットと情報量が増えるに従い、電気

通信はマイクロ波とかミリ波と言つた高い周波数を使わねばならぬ。逆に周波数が高いと電波の干渉とか、地下やトンネル内に電波が入つて来ないなどの通信障害が生じてくる。この欠点を補うのが光ファイバー通信で、通信路の途中で無線(マイクロ波・ミリ波)から有線(光ファイバー)へ通信形態を変換し、良質で無限の情報を送るのである。この研究の中で堤研究室では電波と光とのインタフェイスのハードウェアの部分を担当している。先日京阪奈研究学園都市にある国際電気通信研究所(ATRI)でさきやかながらこの分野の国際会議があつた。その会議の内容から判断すると、この融合技術は衛星間通信技術と共に国家的なプロジェクトにもなりそうである。夢はますます広がる様に思える。

終りに最近良く耳にする大学改革について一言。まずなるだけ授業内容は分りやすく、シラバスなどで学生にサービさせよという文部省の指示がある。これは私の学生時代にふり返ってみるとある程度納得できる。しかしながら科学技術の進歩は急速でこれに追い付くためにはまず自ら勉強するしか手立ては無いであらう。次に産官学による研究の活性化である。こ

れは確かに大学で行なつた研究のいくつかは企業の力を借りるとかかなりのすばらしいものになり、かつ実用化も可能となる事は事実であるが、企業に魅力のある研究と言う制限が加わる不安がある。さらに大学の国際化である。これは分野にもよるが現段階では難解な課題である。国際会議などで外国の大学の研究発表を聞くと、その発想の斬新さに驚かされる事がある。この違いは教育にあるなどと言ふ言われるが、この差異をどこ迄縮められるかが国際化の鍵を握るであらう。

我田引水の感もあるが、私なりの大学の教官として過して来た事および過している事を記したが、これが電友会の会員に何らかの形で参考になればと思つている。



## 「汝自身を知れ」

N T T基礎研究所 主任研究員

林

実

(昭六十二年院修了)

一九八七年春に、衣笠キャンパスにありました立命館大学電気工学科、恩師近屋先生の研究室を巣だつてからはや十年になりました。この間、音声認識処理技術の基礎となる聴覚情報処理機能の研究を進めてきました。ヒトは容易に音声を知覚できます。そのメカニズムを探ることで、音声認識に対するブレイクスルーを果たそうと試みています。

どうしてこの仕事を始めたのか、勿論環境による制約はありました。が、動機は主に二つありました。一つはとても世俗的で、地球規模のグローバルゼーションのなかで、言葉の壁を取り除く一つの手段として自動翻訳電話があればいいな、原稿書きが苦手で音声入力ワープロがあれば便利だなあと思つたのです。そのために音声認識処理技術はそのキーテクノロジに当るからです。

もう一つの動機は、仮に自動翻訳電話、音声入力ワープロができたとして、話す内容がなければコミュニケーションは成立しないし、

原稿も書けない。そのためにはコミュニケーションを取り巻く環境を知ることはもちろん、コミュニケーションをする「汝」を知ることも不可欠です。「汝とは何か」これを少しでもかいまみようとしたのです。

「汝自身を知れ」古代の哲人の言葉を用いるまでもなく、ヒトは自然界のなかでもっとも身近な汝の存在について常に興味の対象としてきました。汝を知るのは、その構造だけではなく、その機能についても知る必要があります。もちろんその機能は身体的な機能に留まらず、その精神の機能も含めて有機的に理解する必要があります。のはいうまでもありません。思考をめぐらす自身、だれでも内観として意識できますが、この内観を客体化するのには容易なことではありません。

しかし、この思考をめぐらすに必要な入力信号としての光や音は物理量として記述できます。この光や音にさらされたときに、われわれはものを見、音を聴くと感じます。ヒトの五感のうち聴覚系の入力には空気の疎密振動の時系列信号として比較的容易に記述することができます。しかも、ヒトの声帯振動からの信号は個体間のコミュニケーションにとって重要です。

コミュニケーションの本質をわずかでもかいまみたく、その機能を解明することで、音声学に対する学術的な貢献だけではなく、音声処理技術の発展に対しても新しい知見を与えることができます。

思えば、母校はとても民主的でした。学生時代は衣笠キャンパスでしたが、食堂、売店、図書など生活にかかわるところはとても整備されていました。また、研究室では、ランダム信号計測研究の対象を気象に選んでいましたので、台風が近づくと、先生も院生も学部生もみんなで交代しながら徹夜して観測したものでした。

また、母校は常に時代の変化を先取りする教育を行ってきました。ランダム信号の解析法は、地球のいき(台風)はもちろん人のいき(音声)の処理にも相通じるものです。また、パソコン上に計測工学の概念図やセンサの回路図を表示して、視聴覚に訴える工夫などして未来の教科書を試みたりしました。今思えば、まさにホームペーの先駆けのを行なっていたのです。

それから、母校は総合大学として、学問の総体のなかで、各専門の相対位置をはかれたことです。たとえば、数多くあるセンサの知識がどんどん多様に細分化するな

かで、計測科学の視点で各センサは、学問の総体のなかでどこに相対的に位置するのかを常に意識させられました。汝を形成する上で母校から多くの影響を与えられました。

先日、立命館大学びわこ・くさつキャンパス(BKC)を訪れ、自然環境に恵まれた新キャンパスで、学生たちが自由闊達でのびのびとしている姿を見て、その若さ明るさ可能性を清々しく思いました。

この新しいキャンパスから、広い視野で総体を展望し、総体の中の汝を見失わず、汝らしい自立した生き方を身につけて、夢を実現できる場を追求め、人間性豊かな若人がひとりまたひとり果だつて行くことでしよう。

時代が移り変わり、技術的な環境や制度的な環境が地球規模で大きく変わろうとしているなかで、こわれやすくて大切なものをどこかに置き去りにしてきたのではないかと、時には内なる汝を素直に見つめ、環境によって変化する汝、変わらない汝、汝自身をもっともつと知ること、修身立命して「ひと」としての自分をまっとうする汝たらんことを。

末筆ながら、電友会の皆様方のご健康とご多幸を、ならびに立命

館大学の今後のますますのご発展を、心よりお祈り申し上げます。



## 電気電子学系だより

電気電子学系系長

岡田 正勝

電気関係四学会関西支部  
「准員のための講演会」

の開催

電気関係四学会関西支部「准員のための講演会」を平成八年十一月二十日(水)午後二時より本学びわこ・くさつキャンパス内ブリズムホールにて開催致しました。

このたびは、慶應義塾大学理工学部教授であり、ソニー・コンピュータ・サイエンス研究所副所長の所真理雄先生を講師に迎え、「インターネットの現状と将来展望」の題目にてご講演いただきました。当日は本学系教員ならびに約二百名の院生・学生の参加がありました。

## 平成八年度電気関係四学会

## 関西支部連合大会の開催

電気関係四学会関西支部連合大会が平成八年十一月二十三日(土・祝)・二十四日(日)に本学びわこ・くさつキャンパスにて開催されました。

特別講演では、脇野喜久男氏(立命館大学、村田製作所)による「低損失セラミックスのマイク

ロ波誘電特性」、英保茂氏(京都大学)による「医用画像計測の動向」、中原恒雄氏(住友電工)による「国際化時代における日本の電気関係学会への期待」などのご講演がありました。

また、パネルディスカッションでは、奥村浩士氏(京都大学)の司会のもとに、「二十一世紀日本の科学技術教育のあり方」のテーマについて、熊谷貞俊氏(大阪大学)、戸高敏之氏(同志社大学)、岡本平氏(和歌山高専)、島田彌氏(三菱電機)、森本孝克氏(松下電器)によるプレゼンテーションがあり、熱心な討論が行われました。

これらとともに、五百件近いシンポジウム・一般講演がありました。学内外より延べ約千二百名余りの企業関係者・大学関係者の参加があり、草津物産の出店とともに、両日ともに盛況でありました。

## 同窓会だより

卒業四〇周年記念  
「衣笠三一會」同窓会

本年は、私達が学窓を巣立って四〇年目に当り五月に記念同窓会を「かんばーる京都」で開催致し

ました。当時の私達は京阪神以外の方も多く今回は幹事の努力で例年の三〇名前後から特に全国へ働きかけた結果、四〇名の過去最高人数の同窓会と成りました。

総会では特別参加の前田先生(辻村先生は御都合で欠席)より母校の近況をお話し頂き、B・K・Cの発展ぶりに心高まる思いで拝聴致しました。引続き懇親会に入り、久し振りに懐かしい顔も見られ旧交を温め近況や昔話に尽きぬ一日と成りました。

私達の幼時は戦時中の「疎開児童」で食べる事の苦しい時代を乗り越えて来ましたが、今日の皆々の元気な姿を見て、益々の健康管理に留意し今後も毎年会う事を確



かめ合いました。(幹事 西村・菊池・奥村・岡村・金森・綱沢・中島・松井・圓山・安田・佃)

辻村・前田研究室  
同窓会

毎年恒例となっています辻村・

前田研究室OB会を去る十二月七・八日(土・日)にかけ、京都堀川丸太町のホテルニュー京都(祇園の間)に於いて開催致しました。今回は、辻村先生の御退職

後最初の会であり、宴会には、遠方の方々を含め六十名の出席となりました。午後六時より、辻村先生、前田先生の御挨拶を受け、二時間余りにわたり盛大に催されました。OBの人数は昨年と変わ

りませんが、例年とは違い、今回は初めての顔ぶれが多く、出席された方々は、学生時代の思い出から近況まで、様々な話題に花を咲かせました。特に、長い間教壇に立たれてきた辻村先生が、退職

されるまでのエピソードを話された時には、年代をこえ、一緒に学生時代に戻ったかのように熱心に耳を傾けていました。同時に、様々な年代の人との親睦を深めることができ、時間が経つのを忘れるほどでした。

さて、前回同様、欠席される

方々に諸経費の寄付を御願い致したところ、多数の方々にご協力頂きました。この欄を借りまして御礼申し上げます。来年は、さらに初めての顔ぶれが多くなることに期待し、ひと味もふた味も違う盛大な会にしたいと思っています。

(文責 川畑・幹事 森岡)

## 事務局だより

会報第八号の発行にあたり御寄稿いただきました皆様方には、心よりお礼申し上げます。昨年十一月の本会総会、電気関係学会に関連する二つの行事などにより本報の発行が通常よりも遅くなりましたことをお詫び致します。

同窓会の開催など随時御寄稿賜りますようお願いいたします。またご連絡先等の変更がありましたら、事務局までご一報いただけますようお願いいたします。

〒五二五―七七

滋賀県草津市野路東二丁目の一  
立命館大学理工学部電気電子学系内  
立命電友会

電話 〇七七五―六一二六六二  
FAX 〇七七五―六一二六六三

(題字は久保之俊氏)